

ミッション・ロード

MISSION ROAD 証言、アメリカを生きる日本人。

渡辺正清



渡辺正清

ミッション・ロード

MISSION ROAD

潮出版社

著者略歴

1938年石川県生まれ。東北大学美学美術史学科卒。米カリフォルニア大学に留学。米国で日本語のテレビ・ラジオの番組制作に携わる。現在ロサンゼルス郡政庁道路課長。

ミッション・ロード

証言—アメリカを生きる日本人

1992年1月25日第1刷

定価1200円（本体価格1165円）

著者 わたなべまさきよ
渡辺正清

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社

東京都千代田区飯田橋3-1-3

電話 03 (3230) 0781

印刷 明和印刷

製本 東京美術紙工

付物 栗田印刷

万一、落丁、乱丁の場合はお取り替え致します。

©Masakiyo Watanabe 1992 Printed in Japan

ISBN 4-267-01276-8 C0095 P1200E

まえがき

一九六二（昭和三十七）年六月、私は、留学生として米カリフォルニア州ロサンゼルスに来て、それ以来ひきつづき、そこで生活しています。その間、米大統領は六回代わりました。ケネディからジョンソン、ニクソン、フォード、カーター、レーガン、そしてブッシュ大統領。日本を發つたときは池田首相、つづいて佐藤、田中、三木、福田、大平、鈴木、中曽根、竹下、宇野、そして海部首相と十一代。

ロサンゼルスにおけるほぼ三十年の生活のなかで、「私は、日本人である」ということを強く意識させられたことが、たびたびありました。その最初は、感謝祭の日でした。

アメリカへやってきた年の九月、カリフォルニア大学（UCLA）に入学、十一月の感謝祭にアメリカ人家庭に招よばれました。「感謝祭」は、十七世紀、メイフラワー号で新天地アメリカへ渡ってきた清教徒移民が、さいしよの収穫を感謝したことにちなむ祭日です。

私を招んでくれたのは、医師夫妻で、キャデラックで迎えにきてくれて、ベバリーヒルズの邸宅に連れてゆかれました。まず、庭に案内されましたが、それは公園とよぶ方がふさわしい広大さで、庭園のなかに道がいくつにも岐わかれていました。庭を歩きながら、何か言わな

ければと焦っていましたが、適切な表現が思いつかぬまま黙って主人のあとをついて歩きました。

七面鳥の肉とカボチャのパイのディナーがすみ、コーヒーを飲んでいるときも、主人はじぶんの庭園を誇らしげに、こだわっていました。

「いい庭でしょ？　うちは日本人の庭師を雇っているんです。かれは勤勉で、言ったことは何でもするし、優秀です」

ディナー・テーブルでの会話としては、場ちがいなものを感じ、私の心にこだわりとして残りました。

庭仕事を職業としている日本人が多いことは、ずつとのちに知りました。

一九六七年十二月、トーマス・ノグチという日本人がロサンゼルス郡検視局長コッナに就任し、その記者会見に臨みました。そのころ、私はアメリカにとどまる決心をして、ロサンゼルス郡政庁に勤務しながら、日本語放送の報道番組を担当していました。マイクが十数本ならび、テレビ・ライトを浴びながら、ノグチ新局長は抱負を語り、報道陣の質問にときばき答えているさまを見ていて、こんな日本人がアメリカにいたことを驚き、たのしく思いました。ところが、野口さんを待ちうけていたのは、白人ブゾ体制のなかに残る保守体質の反撥でした。

局長解任、闘い、復職、停職、降格、そして闘い、敗れました。

これから書こうとしている「野口事件」はすでに結末をみってしまったドラマです。

しかし――

野口さんが、日本人という使命^{ミッシン}を背負って、アメリカを生きたま^{ロード}ちは、それまで誰も通らなかったみちであつたからこそ、のちの日本人がアメリカを生きてゆくうえでの指針になるのではないか、これが「野口事件」を書くにいたつた動機です。（なお、検視局ビルはミッシオン・ロード――〇四番地にあります）

「アメリカに住む以上、日本人はアメリカに同化してゆくべきである」と発言したのは、ロサンゼルスを訪れた日本の首相です。

ひとつの道理は含んでいます。しかし、ここでいう「アメリカ」とは何を指しているのでしょうか？

もし、白人^{アングロ}の支配している体制をもってア、メ、リ、カとよぶのであればまちがいで、アメリカのなかには白人^{アングロ}だけでなく、黒人、ラテン系、アジア系、そして原住民であるアメリカン・インディアンが生活していることを忘れてはなりません。もうひとつ、「同化する」ということは、現実の社会では不可能といつていいほど難しく、少なくとも、異なった文化、歴史、

習慣、宗教をもっている他人種への理解をもつ努力が必要である、というところだとどめておきます。

アメリカへ来てさいしよの感謝祭に私を招いてくれた白人医師のことばが、いまだに私の記憶に残っているのは、かれが、無意識であつたと思いますが、日本人を使っていることをあたりまえとしていたからです。そののちにも、この種の発言を白人からしばしば直接耳にしました。

ところが、日本人に使われる立場におかれた白人は、無意識であつたものが顕在化し、おもしろくありません。その種のもつともあからさまな表現が、野口さんに浴びせられた仕打ちです。

野口さんが歩んできたみちを考えると、私は、日本の戦後の「経済復興」がたどったみちに類似点を見る思いがします。

まず、野口恒富という日本人が、トーマス・T・ノグチ、ロサンゼルス郡検視局長になるまでのみちをたどってみます。

医学士、野口恒富青年がカリフォルニア州サンフランシスコ港に着いたのは、一九五二年（昭和二十七年）六月二十四日であった。二十五歳。

同州オレンジ郡立病院にインターンとして勤務することに決まっていた。

ひとまずロサンゼルス在住の医師、原初治を訪れた。原医師は、横須賀で耳鼻咽喉科を開業していた野口さんの父・渉氏の友人であり、野口さんとも旧知の間柄であった。

「ツネトミ、というのは難しくて、アメリカ人に正しく発音してもらえないし、覚えにくい名前ですね」

原初治夫人が言った。

「ツ・ネ・ト・ミ、ツネ・トミ、そうだ、トミー、トーマスがいい」

ということになった。トミーはトーマスの愛称である。ジョンがジョニー、ジェームスがジム、ジミーとよばれるのと同じ。恒富の頭文字Tが、ミドル・ネームとして残り、

Thomas T. Noguchi

が、ここにうまれた。『トーマス』——野口さんの「アメリカナイゼーション」の第一歩であった。

三十歳まであと五年、かれはその五年間の目標、心構えを決めた——

一、日本語を絶対に使わないこと

一、日本からの友だちをつくらないこと

一、思いきり働いて、白人なみになること

「いまから考えると、少しキザな感じがしますがね……」

二十数年まえのインタビューのとき、野口さんはいたずらっぽく言ったことがある。

昭和二十二（一九四七）年、恒富青年は日本医科大学に入学。東京の街なかにはまだ焼け跡があり、敗戦の痛手から抜けていなかった。

入学初日から、じぶんを改造することに努めた。まず、誰ともつきあわないで、勉強だけの生活を強いること。

それ以前の大学予科時代は、旧制高校生にみられるバンカラな学生であった。監獄に入るようなことは別として、青春の許されるギリギリの悪いことなら何でもやった。

「世間を勉強しなければならない」（野口）
という気持があった。

予科二年のとき敗戦。予科も大学の建物も焼失。哲学思想書を読みあさる一方、多摩川べ

りをマントを着て、朴^ほ齒^おの下駄を鳴らして寮歌を放吟して歩いた。寮生のなかでは、いちばん汚れた服装をしていた。

「バンカラというのはアメリカ人はわからないんですね。駐留軍の兵隊が貧乏人だと思ってチョコレートをくれたと、友人が嘆いていました」（野口）

酒はよく飲み、タバコも日に二箱吸っていた。そんなかれが百八十度の転換をじぶんに強いたのである。

まず、タバコをびったりやめた。それだけではしょうがない、ひととのつきあいや酒を飲みに行ったりするのは時間のムダ、というわけで、すべてを排して勉強にうちこむ日程をつくった。

朝六時に起床、勉強。

「子どもじみてるようだけど、予習復習をやったんです。先生のところへ行つて、来週の講義の内容はどういうところでしょう、とまえて聞いておくんです」（野口）

朝食をすませて大学へ行き、講義を受ける。昼休みは、

「近くの根津権現に消えちゃうんです」

そして勉強。昼食は抜く、食^をべると睡^{ねむ}くなるから。

医大入学当時は、停電、断水、食糧不足、買い出し、そのような時代であった。

幸いなことに、犯罪防止の意味から街灯だけは消さなかった。外へ出て街灯の下でマントを着て本を読んだ。

週末には、父親のいる横須賀に帰り、米海軍病院へ行った。一年生のとき、アメリカの医学教科書を書き写し、専門用語を英語で覚えていった。

何度も通っているうちに軍医と親しくなり、病理に出入りできるようになる。

「大学医学部といっても顕微鏡もない時代ですからね。これがアメリカの顕微鏡か、アメリカではプレパラートはこうしてつくるのか……、見るものすべてが驚きでした」（野口）

日本医大病理教室に入ってから法医学というまったく新しい学問に挑戦する。

「じぶんを試してみたかった。試しきらない力が、まだじぶんにはあると思っていたんですね」（野口）

その当時、日本ではまだ法医学の分野は進んでいなかった。法律的解释は全然せず、ただ人殺しだったかそうじゃなかったかの科学捜査のみ。たとえば、医療上の過ちのばあい、損害賠償の責任については何も論じられていなかった。

野口さんは、法律の知識が必要と考え、中央大学第二法学部に入る。医学部ではドイツ語をやっているのです、法律は仏法をとる。アテネ・フランスに通ってフランス語を勉強した。

六法は習得したが、東大病院でのインターンが始まり、時間の調整がつかなくなり、法科の卒業はみあわせることにした。

にんげんをつくるには果たして勉強だけでいいのだろうか、という疑問がわいてくる。そのきっかけは、ラジオ放送だった。

「戦後はじめてラジオから、『本日から天気予報をお伝えします』というアナウンサーの聲が流れてくるのを聞いて、にんげんに対して震えるようなものを感じました……。平和のよさを身にしみて味わいました」（野口）

あとで調べて知ったことだが、天気予報が日米開戦以来三年八カ月ぶりに復活したのは、敗戦一週間後の八月二十二日、東京地方だけであつたがNHK正午のニュースのすぐあとに放送された。その復活天気予報第一号は、「天気が変わりやすく、午後から夜にかけて時々雨が降る見込み」ところが、実際には、深夜になって最大風速三二メートルという小型台風の急襲をうけた。

天気予報は当たらなかつたが、若い医学徒に平和のよさを感じさせ、眼をひろげるきっかけを与えたことはさすがらしい。

日曜日には油絵をやった。かれの父親も若いときから油絵をやっていた。野口さんは、父親が九州大学医局に勤務しているときに生まれたのだが、恒富という名前は、北野恒富とい

う父の絵の先生からとったものだった。

敗戦後、文化ということばが流行し、鎌倉には種々の文化団体がうまれた。かれの母親の音楽学校の同級生がやっている混声合唱団に入って歌ったりもした。

「アメリカへ行って、医学の勉強を続けよう」

という夢は、米海軍病院に通って、進んだ米医学に接しているうちにふくらんでいった。決定的な衝撃を与えたのは、ペニシリンという抗生物質であった。

日本医大を卒業し、東大病院でのインターンをすませ、国家試験を受け結果を待たずに日本を離れた。

オレンジ郡立病院は、ロサンゼルス都心から南へ五〇^{キロ}。いまでは工業団地ができ、住宅が密集しているが、野口さんがやってきた一九五二年のころは、フリーウェイはまだなく、その名が示すように南国の太陽をいっぱいにうけたオレンジの畑が多く、のどかな景観がひろがっていた。

野口さんは、サンフランシスコの港に着いた日からちょうど一週間後の七月一日から、オレンジ郡立病院でインターンを始めた。

まず、産婦人科に配属された。責任者のウィルバー医師に、

「きょうから、ここでインターンを始めますので、よろしくお願いします」

とあいさつした。すると、同医師は、

「じつは、わたしは転勤することになっている。きょうが、さいこの日」

という。そして、

「きょうから、きみが責任者だ」

と言われて、野口さんはびっくりする。

お産は、東京の日赤病院で五、六回見たことはあったが、じぶんで赤ん坊をとりあげたことはない。

その日にお産は三件あったが、無事にすませた。七月には、二百件ものお産があった。

週末の休みはとれず働きづめ、冷房設備はなく心身ともに疲れはてた。

八月には麻酔科に移った。

これも新しい経験だった。

「東大病院でのインターン時代にも、実際に麻酔をつかったことはなかったんです。この病院ではじぶんでやらなければならなくなって。理論は知っていましたが、実践するのは初めて。

手にやけどをした子どもが運びこまれてね、最初の患者です。その手を見て、野口英世のことを思い出しましたよ。外科手術をするのに麻酔をうったんです。ところが、効かないんだな、これが。子どもはとびあがるし……。よし、もうすこし麻酔をうとう、……てな調子でした」

そのうち、病理学の分野でめきめき腕をあげた野口さんは、ロマリンダ大学医学部教授を経て、一九六一年、ロサンゼルス郡検視局に招聘しょうへいされた。

六七年十二月、検視局長に昇進、四十歳の若さであった。ここに、トーマス・ノグチは白人に追いつき、白人を追いこしたのである。

ミ
ッ
シ
ョ
ン
・
ロ
ー
ド
●
目
次

まえがき 1

I 辞職勧告、一九八二年 19

「十三年まえと同じ」 20 検視局に関する報告書 23

II 闘うノグチ、一九六九年 29

辞職勧告 30 検視局長解任 35 闘う決意 41

電波メディアと新聞 46

III 公聴会の証言、一九六九年 51

精神異常者 52 日系人秘書の涙 55 法医マフィア 64

「麻薬患者」 66 赤い日誌 71 議員の奢り 75

黒人、主張と忍耐 78 週末のできごと 85

IV 判決、一九六九年 91

落とし穴 92 「おとなしいアメリカ人」 97 勝利の行進 102

生きかえった検視局長 105

V 死者の証言 111

マリリン・モンローの影 112 ウィリアム・ホールデンの死 115